



進修同窓会HPにアクセス



筑波山ロープウェー女体山駅から見た男体山と関東平野(上)
男体山山頂から見える霞ヶ浦(左上)

筑波紀行 2

1899〔明治32〕年の1・2年生の春期修学旅行は、筑波登山でした。5月25日未明に徒歩で本校を出発した一行は、小田、北条、白滝を経て、いよいよ筑波の急峻に挑みます。今号でも、2年生山口鼎太郎(中2回)の「筑波紀行」で、その行程を辿っていきます。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。「筑波紀行」の見出し及び句読点は、筆者によるものです。また、【 】は筆者による注記です。

なお、「土中生の登山ルート」は、進修同窓会HPの『月刊Acanthus』第168号3頁に掲載しています。

筑波紀行 二乙 山口鼎太郎 四 男体山に挑む

「然ルニ哉【白滝の】風景ニ恋々時間ヲ費ス」【こと】ヤアル。イデヤ、コレヨリ登山ヲ試ミント、一行杖ニ倚リ、勇ヲ鼓シテ之ヲ攀ツ【攀ツ】。心臓鼓動大ニ激シ、氣息喘々【せんせん】「喘」は、あえぐ。息切れる【、】、両脚疲労、一行窮色【きゆうしよく】「窮」は、逆境・貧乏などに追い詰められて苦しむ。窮する【アリ。益【ます】登レバ益儉【「陰」の誤り】ニ、流汗背ヲ濡【うる】ホシ、右手ノ扇モ、左手ノ手拭モ、暑サヲ送ルヨスガ【縁【よすが】】 物事をするのに、頼りになるもの【ニモノラデ、一步ニ一登、一登ニ一喘、余【何【いつ】シカ雲齊【「霽【は】の誤り】レテ【注1】ト唱フモ、「玄海灘」ノ次句ヲ発スルモノナク、唯互ニ黙行スルノミ。覗【み】視【上】グレバ万丈ノ青壁削ルガ如ク、覗下ロセバ千尋ノ深潭【しんたん】淵【藍ノ如シ。老樵【ろうしやう】「樵」は、きこり】ノ薪ヲ担ヒテ羊腸タル山径ヲ危ガニ辿リ下レルハ、如何ニ詩的ナル。尚上ル【数町ニシテ、一条ノ清泉懸レリ。之レ当山名所ノ一ナル男女川【みなのがわ【注2】ナリ。嗚咽【おえつ】むせび泣き】潺湲【せんかん】水が清く、さらさらと流れるさま。また、その音を表わす語、琴瑟【きんじつ】「琴【こと】と瑟【おこと】】ノ如ク、試ミニ一掬【いっさく】ひとすくい【の水】。「掬」は、両手でひとすくいすること【舌端ニ触レシメンカ、渴情立【たちどこ】ロニ癒ユベシ。戯レニ巨石ヲ転ズレバ小

蟹忽子狼藉【ろうぜき】タリ。鞋底【あいてい】靴の底。転じて、足もと【ヲ谿【けい】「溪」と同字】水ニ洗ヒ、心胆ニ鞭チテ、又痛キ足ヲ引キズリツ、急坂ヲ攀ツル【数十町。坂路行キ尽クシテ、御幸ヶ原五軒茶屋の】一茶点ニ憩ヒ、少焉【しばらく】ニシテ又発ス。荊棘【けいきよく】「荊も棘も、いばら】縦横、衣端ヲ釣シ、落葉堆積土ヲ埋メ、之ヲ踏メバ簳々【そくそく】トシテ声ヲ発ス。羊腸タル鳥徑【ちようけい】わずかに鳥の通うほどの山中の細道【熊路ヲオシ別チテ、鉄鎖ヲ引き、尚攀登スル【数町。漸クニシテ【男体山】の絶巔【ぜつてん】山の絶頂】ニ達ス。地ハ之レ予想外ノ好景絶佳【ぜつつか】すぐれて美しいこと【ニシテ、眺メンカナ、霞湖【霞ヶ浦】ノ大景ハ濶然【かつぜん】「濶」は、面積が大きい。広い【トシテ眼中ニ展開シ、帆船漁舟ノ去来集散点々数フベシ。遠ク目ヲ放テバ、武【武州【武蔵国】】総【総州【上総・下総国】】ノ山川髣髴【ほうふつ】ぼんやり見えるさま【ノ間ニ隠見【いんけん】見え隠れすること】シ、雲耶山耶青一髪又一髪【注3】。土浦石岡ノ街衢【がいく】まち。ちまた【、亦模糊【もこ】ぼんやりしたさま。曖昧模糊【あいまい】ノ間ニ横ハル。春風颯忽【ひようこつ】飄忽【軽くてすばやいさま】「颯」は、つむじ風。疾風【トシテ、万籟【ばんらい】「籟」は、ひびき】万物の、風に鳴る音【怒号スト聞ケバ、蕭々【しゆくしゆく】タル軽風予等ガ衣袂【いべい】袂は、衣のたもと【ヲ襲フ。頭ヲ北方ニ回セバ、連轡【れんらん】やまなみ。【轡】は峰【蜿蜒【えんえん】「蜿蜒」が正しい。蜿

蜒長蛇の列【トシテ、眺望ヲ縦【ほしいま】ニスル能ハズト雖、日麗カニ、鬢鬣【あいたい】雲の盛んなさま【タル煙霞、春光ヲ包ム。満山皆之レ花ニシテ万朵【ばんだ】「朵」は、垂れ下がった枝【ノ花ノ艶【えん】ナシト雖、之レニ代フルニ、青緑愛スベキ老樹、新鮮掬スベキ緑草ノ満峯ヲ蔽ヘルアリ。風光明媚、偉観壯絶、名状スベカラズ。身ハ羽化【うか】中国の神仙思想で、人間に羽が生えて空を飛ぶ仙人となること。羽化登仙【シテ登仙スルガ如ク、真二天下ノ奇景タリ。昔時【せきじ】ハ此山ニ狐狸多ク、屢【しばしば】行人【ぎようにん】行者【ヲ弄【もてあそ】ベリナド云ヘド、今ヤ文明開化ノ昭代ニ遭遇シ、狡智【けんち】「狡智【こうち】ずるがしこい知恵】の誤りか【ノ獸皆悉ク遁逃【とんとう】「遁」は、のがれる【シタルニヤ。又其足跡ヲダモ留メズ。】

【注1】「何【いつ】シカ雲齊【「霽【は】の誤り】レテ」 出典は、1892「明治25」年に発表された日本の軍歌「元寇」。作詞・作曲は、『歩兵の本領』、『雪の進軍』などを手がけた陸軍軍楽隊士官の永井建子(ながい けんし 1865~1940)。全4番から成り、「四百余洲(しひやくよしゅう)を拳(こぞ)る 十万余騎の敵で始まり、「いつしか雲はれて 玄界灘月清し」で終わる。YouTubeで聴くことができる。

【注2】男女川 筑波山から南流し、逆川に合流した後、つくば市大貫・中菅間付近で桜川に注ぐ。歌枕として知られ、陽成院(陽成天皇)の歌「筑波嶺(つくばね)の峰より落つる男女川恋(こひ)ぞつもりて淵となりぬる」(『後撰集』恋三)は、小倉百人一首にも採録されている。

筑波山塊地図

(明治44年発行 一部修正)

筑波山名所絵図 (下)

